

第Ⅲ章 調査の概要

1 調査体制

調査は、洲本土地改良事務所の委託を受け、淡路市教育委員会が主体となり実施した。各年度毎の調査体制は以下のとおりである。

平成17年度（第1次確認調査）

教育委員会事務局 内海 孝（教育長）
池本正義（次長）
深山四郎（社会教育課 課長）
望月奉文（社会教育課 参事）
池上哲司（社会教育課 課長補佐）
事務局兼調査担当 伊藤宏幸（社会教育課 埋蔵文化財係長）
川吉知子（社会教育課 埋蔵文化財係 主査）
足立敬介（社会教育課 埋蔵文化財係 主査）
金田匡史（社会教育課 埋蔵文化財係 主事）

平成18年度（第2次確認調査）

教育委員会事務局 内海 孝（教育長）
池本正義（次長）
深山四郎（社会教育課 課長）
望月奉文（社会教育課 参事）
奥田 篤（社会教育課 文化財担当参事）
池上哲司（社会教育課 課長補佐）
事務局兼調査担当 伊藤宏幸（社会教育課 埋蔵文化財係長）
大石雅一（社会教育課 埋蔵文化財係 主査）

平成19年度（本発掘調査）

教育委員会事務局 内海 孝（教育長）
山崎高志（次長）
深山四郎（社会教育課 課長）
奥田 篤（社会教育課 文化財担当特命参事）
池上哲司（社会教育課 課長補佐）
事務局兼調査担当 伊藤宏幸（社会教育課 埋蔵文化財係長）
大石雅一（社会教育課 埋蔵文化財係 主査）

足立敬介（社会教育課 埋蔵文化財係 主査）
調査補助員 坂 良子（社会教育課 埋蔵文化財係臨時の任用職員）

平成20年度（本発掘調査・第3次確認調査）

教育委員会事務局 内海 孝（教育長）
瀧 宗生（次長）
柿原一郎（社会教育課 課長）
奥田祥嗣（社会教育課 副課長）
上坂昌宏（社会教育課 副課長）
事務局兼調査担当 伊藤宏幸（社会教育課 課長補佐兼埋蔵文化財係長）
足立敬介（社会教育課 埋蔵文化財係 主査）
調査補助員 坂 良子（社会教育課 埋蔵文化財係臨時の任用職員）

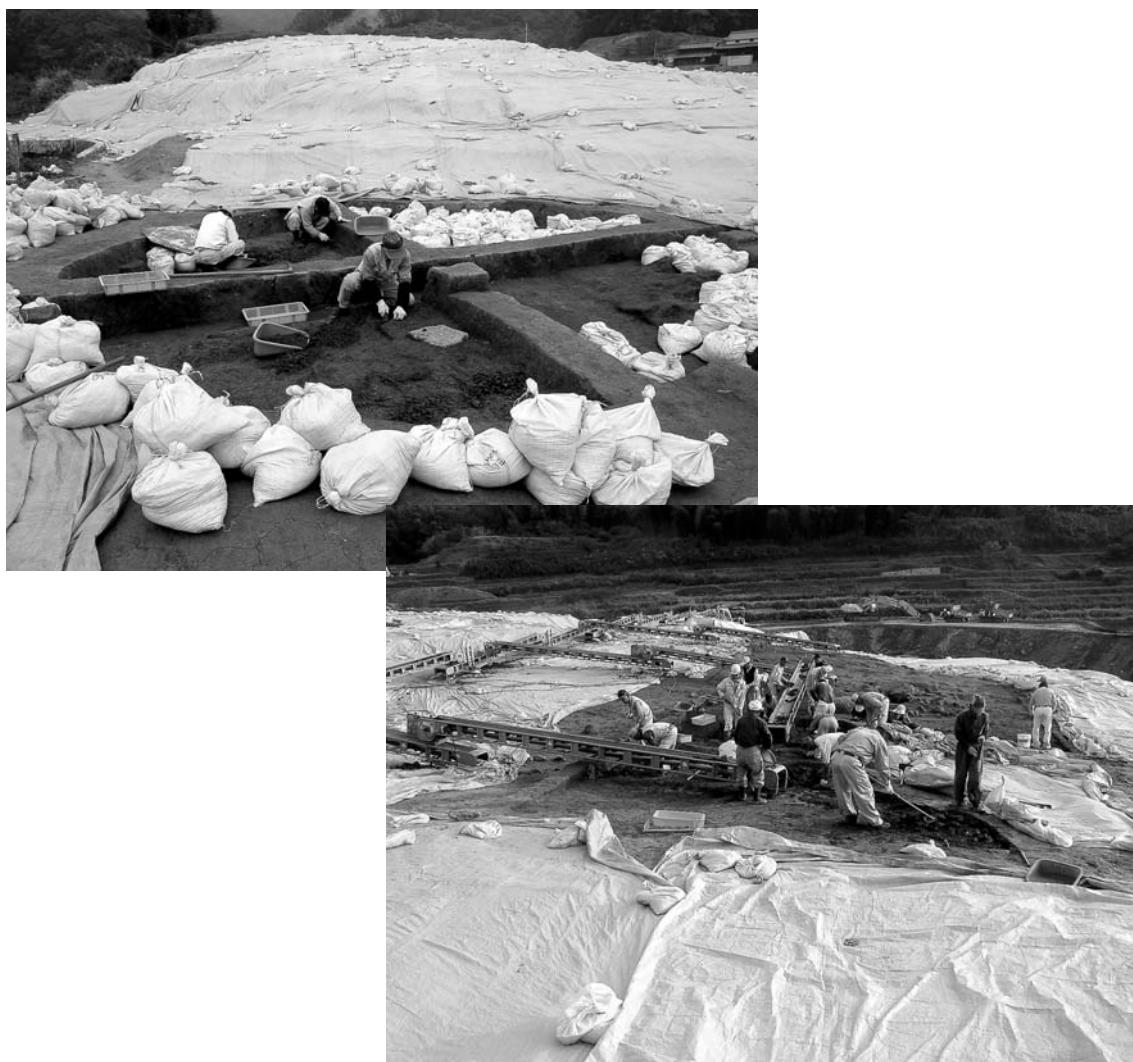
平成21年度（整理作業）

教育委員会事務局 内海 孝（教育長：平成21年4月～6月）
森 重和（教育長：平成21年7月～）
瀧 宗生（次長）
柿原一郎（社会教育課 課長）
奥田祥嗣（社会教育課 副課長）
上坂昌宏（社会教育課 副課長）
元木陽介（社会教育課 埋蔵文化財係長）
事務局兼調査担当 伊藤宏幸（社会教育課 課長補佐）
大石雅一（社会教育課 埋蔵文化財係 主査）
足立敬介（社会教育課 埋蔵文化財係 主査）
調査補助員 湯谷恭幸（社会教育課 埋蔵文化財係臨時の任用職員）
富田幸広（社会教育課 埋蔵文化財係臨時の任用職員）
坂 良子（社会教育課 埋蔵文化財係臨時の任用職員）
遺物整理員 田浦あい子（非常勤一般職）
増田ゆかり（非常勤一般職）
中野美恵子（非常勤一般職）
山下 紘理（非常勤一般職）
足立登紀子（非常勤一般職）
正司 博代（非常勤一般職）
来田真奈美（非常勤一般職）

平成22年度（第4次確認調査・整理作業）

教育委員会事務局 森 重和（教育長）
新開正章（教育部 部長）

鈴木 勝（教育部 社会教育課 課長）
奥田祥嗣（教育部 社会教育課 副課長）
上坂昌裕（教育部 社会教育課 副課長）
元木陽介（教育部 社会教育課 課長補佐兼文化財係長）
事務局兼調査担当 伊藤宏幸（教育部 社会教育課 主幹）
大石雅一（教育部 社会教育課 文化財係 主査）
足立敬介（教育部 社会教育課 文化財係 主査）
調査補助員 湯谷恭幸（社会教育課 文化財係臨時の任用職員）
坂 良子（社会教育課 文化財係臨時の任用職員）
遺物整理員 田浦あい子（非常勤一般職）
増田ゆかり（非常勤一般職）
中野美恵子（非常勤一般職）
山下 絵理（非常勤一般職）
来田真奈美（非常勤一般職）



第4図 調査風景

2 調査の概要

A 確認調査（平成 17・18・21・22 年度）

確認調査は、遺跡の範囲や内容を把握することを目的として実施した。2×2 mの調査坑を基本とし、必要に応じて2 m幅のトレンチ（溝）を設けて発掘調査することとした。調査の期間と面積は第1表のとおりであり、調査坑の位置は第7図に示したとおりである。

第1次確認調査は、事業予定地全域を対象として実施した調査であり、そのうち五斗長垣内遺跡に係る調査箇所は、176m²（44箇所）である。その内、39箇所の調査坑で弥生土器や中世の陶磁器を中心とする遺物が出土し、5箇所でピットや溝などの遺構が検出された。この結果から、遺跡は弥生時代後期と中世の2時期の集落跡であることが確認され、東西に伸びる尾根の南斜面を中心に広範囲に広がることが予想された。

第2次確認調査は、さらに詳しい遺跡の内容と範囲を把握する目的で、トレンチを併用した調査を実施した。その結果でも、遺物包含層から多量の弥生土器が出土するとともに、遺構も多数検出されるなど、遺構の密度も濃いことが予想される結果となった。

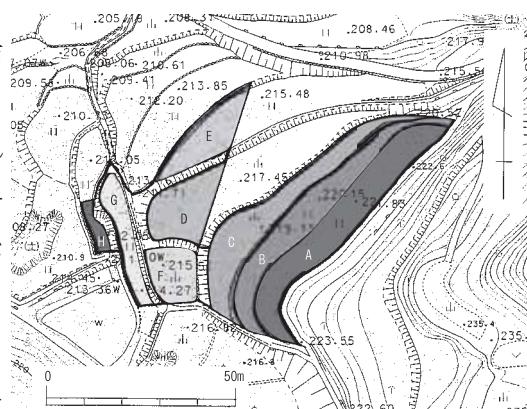
第3次・第4次確認調査は、本発掘調査の結果、遺跡の重要性が明らかとなったことから、その範囲を明確にする目的で実施した調査である。第3次調査においては、遺跡の南限を明確にするため、遺構が検出された尾根の南に6本のトレンチを設定し、発掘調査を行った。その結果、尾根の南側には蛇行する埋没谷が存在し、尾根から谷部に向かっては急傾斜で落ち込んでいることが確認された。この斜面や谷部においては遺構は検出されなかった。

また、第4次調査は、遺跡の東端を確認することを目的として実施した調査である。本発掘調査①地区の東端まで遺構が確認されたが、そこを境に斜面が急傾斜となる。第4次確認調査では、そこに8箇所の調査坑を設置し、遺跡の広がりを確認することとした。その結果、遺構や遺物包含層は確認されず、遺跡は①地区の東へは広がらないことが確認された。

B 本発掘調査（平成 19・20 年度）

調査の方法

本発掘調査の範囲は、確認調査の結果をもとに、東西に伸びる尾根を中心に17,886m²を対象として実施した。調査区は大きく①地区から⑦地区の7つの地区に分かれ、④地区については、調査工程の関係で④-1、④-2、④-3の3地区に細分した。なお、特に面積が大きな①地区と④地区については、調査着手前の水田区画をもつて小地区とし、大文字アルファベットを付して呼称することとした。それらの地区割りは、第5・6図に示したとおりである。



第5図 ①地区地区割り図

調査は、平成 19 年度、平成 20 年度の 2 ヶ年に分けて行うこととし、事業工程との調整の結果、遺跡西方から順次調査に着手した。平成 19 年度は④- 1、④- 2、⑤、⑥、⑦地区の合計 10,108m²、平成 20 年度は①、②、③、④- 3 地区の合計 7,776m²の調査を行った。なお、調査期間の短縮を図るため、遺構の実測作業は航空写真測量を用いて実施した。

なお、検出した遺構は大文字のアルファベット 2 文字と 3 衝のアラビア数字とからなる略号で呼称することとした。2 文字のアルファベットは、竪穴建物跡 (S H)、掘立柱建物跡 (S B)、溝 (S D)、土坑 (S K)、落ち込み (S X)、ピット (S P) とし、それに続く数字は、遺構種別毎に平成 19 年度調査が 201 番から、平成 20 年度は 301 番から始まる通し番号を付した。なお、建物跡に伴う柱穴と焼土面 (炉跡) については、冠するアルファベットは柱穴 (P)、焼土面 (R) の 1 文字とし、建物跡を表す 3 衝の数字の後に 2 衝のアラビア数字を付した 5 衝の数字を用いて表記した。

平成19年度調査

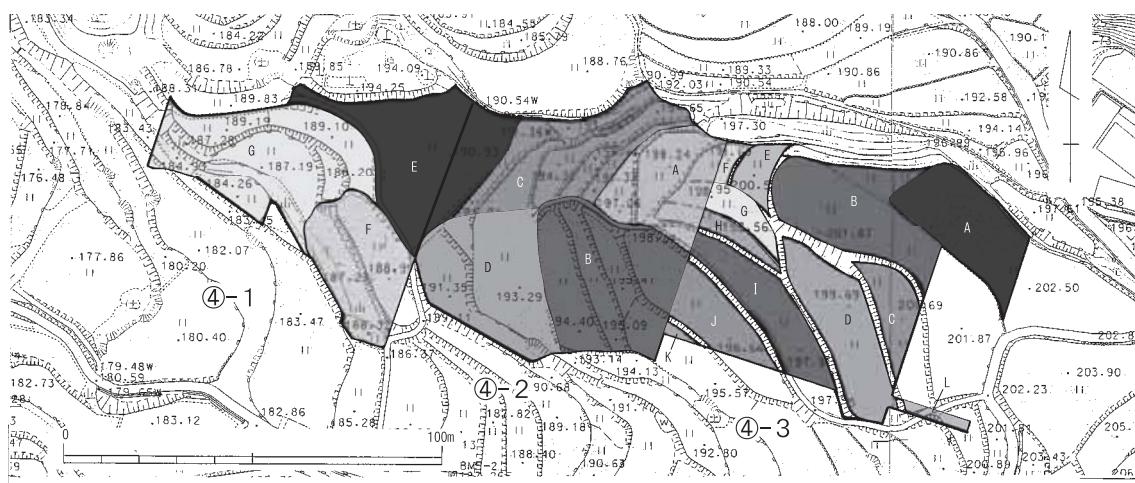
平成 19 年度は、丘陵の先端部分の④- 1・④- 2 地区 (7,126m²)、南の谷を隔てた尾根北側斜面の⑤地区 (361m²)、⑥地区 (615m²)、⑦地区 (2,006m²) の合計 10,108m²を調査した。現地調査は、平成 19 年 5 月 23 日に⑤地区から順に着手し、最終の④- 2 地区の調査が完了したのは、平成 20 年 3 月 18 日である。

なお、調査成果については森岡秀人氏（芦屋市教育委員会）を招聘し、現地指導を受けた。

平成20年度調査

平成 20 年度は、丘陵部を中心に、①地区 (2,749m²)、②地区 (437m²)、③地区 (310m²)、④- 3 地区 (4,280m²) の合計 7,776m²の調査を実施した。現地調査は、平成 20 年 5 月 7 日に②地区から着手し、現地調査が終了したのは平成 21 年 3 月 31 日であった。

平成 20 年度調査については、④- 3 地区で鉄器製作に関する重要な遺構が検出されたため、兵庫県立大学大学院生命理学研究科の森永速男教授、愛媛大学法文学部東アジア古代鉄文化研究センター長の村上恭通教授、岡山大学文学部の松木武彦准教授を招聘し、調査指導を受けた。





第7図 調査区位置図

調査	調査期間	面積	担当
第1次確認調査	平成17年11月16日～平成18年2月9日	514m ² (128箇所)	伊藤・川吉・足立・金田
第2次確認調査	平成19年2月27日～平成19年3月13日	128m ² (24箇所)	大石
第3次確認調査	平成21年2月24日～平成21年3月24日	121m ² (6箇所)	伊藤・足立
第4次確認調査	平成22年6月8日～平成22年8月31日	129m ² (8箇所)	足立
本発掘調査I	平成19年5月23日～平成20年3月18日	10,108m ²	伊藤・大石・足立
本発掘調査II	平成20年5月7日～平成21年3月31日	7,776m ²	伊藤・足立
整理作業	平成21年4月1日～平成23年3月31日	—	伊藤・大石・足立

第1表 調査一覧表

C 整理作業（平成21・22年度）

整理作業は、平成21年度、22年度の2カ年で実施した。整理の対象となった出土遺物の量は、28 トル入りコンテナ182箱を数える。

整理作業は、出土遺物の水洗い、注記、接合・補強、復元、実測図の作成と製図、報告書図版の作成などの遺物整理と遺構実測図や写真などの発掘調査資料の整理作業等を行った。整理作業を行う遺物については、あらかじめ遺物の種別を表す大文字のアルファベット1文字と4桁のアラビア数字を組み合わせた番号を付した。冠するアルファベットは、遺物の種別毎に、黒色土器(B)、土器以外の土製品(E)国産陶磁器(D)、瓦器(G)、土師器(H)、金属製品(M)、古代の国産陶器(N)、石製品(S)、製塩土器(T)、須恵器(U)、弥生土器(Y)、その他の遺物(Z)と定めた。なお、本報告書では、各通し番号とこの遺物番号を併記した。

分析や処理に関する専門的知識と技術を要する鉄製品の整理作業については、現地調査の時点から指導を受けてきた愛媛大学の村上恭通教授の指導を仰ぐこととし、分析・処理作業を愛媛大学法文学部東アジア古代文化研究センターに依頼することとした。また、整理作業の途上、出土した石器に赤色顔料の付着するものがあることが明らかとなつたため、九州国立博物館の志賀智史氏に調査指導を仰ぎ、成分の分析作業を九州国立博物館に委託することとした。また、出土した石製品の材質については、兵庫県立人と自然の博物館の先山徹氏に石材鑑定についての指導を仰いだ。さらに、遺跡の古環境復元に資するため、花粉分析を行うこととし、分析資料のサンプリングなどについて、松下まり子氏を現地に招聘し指導を仰いだ。そのほか、建物跡出土炭化材の樹種同定やガラス製品の成分分析、土器の胎土分析などの各種科学的分析はパリノサーヴェイ(㈱)に作業委託した。

また、微小鉄片を含む微細な遺物の採集を目的として、竪穴建物埋土の水洗選別を行った。特に、調査指導等により、鍛冶関連遺構が存在する可能性を認識したことにより、水洗選別した土を乾燥させ、磁石(3,800ガウス)を用いた微小鉄片の採集に努めた。なお、資料とした土は、竪穴建物を4分割した区画毎に5箇所のサンプリング地点を設け、採取したものを対象とした。また、深い竪穴建物跡については、上層から床面までを3層に分けて採取している。さらに、鍛冶作業に伴う微小鉄片は建物床面に散乱する可能性があることを考慮し、床面精査作業時の土も床面直上土としてサンプル採取している。

この結果、微小な鉄製品を採集することができたが、全ての竪穴建物埋土を対象として作業を実施し

ていれば、さらに多くの鉄製品が採集できた可能性がある。また、特に焼土面を有する建物床面から採取した土では、その中に含まれる微小な土器片やサヌカイト片、砂粒などが磁石に付着することが確認された。これらの土との比較資料とするため、地山の中から採取した土について同様の作業を行い、磁石への砂粒の付着状況を確認した。

D 鍛冶作業復元実験

焼土面（炉跡）を有する堅穴建物跡から、鉄製品や鍛冶工具の可能性がある石製品が出土したことから、これが鍛冶工房であることを検証するため、本遺跡で検出された遺構や遺物から想定される作業内容の復元実験を試みた。詳細については、第VI章で詳述する。



第8図 整理作業及び鍛冶復元実験風景